

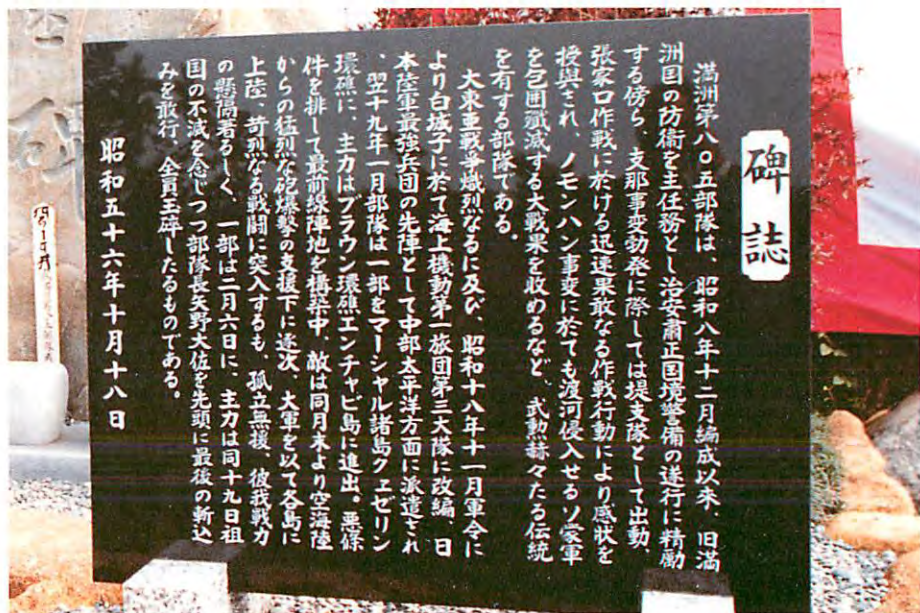
海上機動第一旅団
第3大隊 慰霊碑

元関東軍独立守備隊
第16大隊
昭和19年2月、ブラウン環礁
およびケゼリン環礁で玉砕
所在地 愛知県幡豆町
三ヶ根山
(64頁参照)



海上機動第一旅団
第1大隊 慰霊碑

元関東軍独立守備隊
第11大隊
昭和19年2月、ブラウン環礁
で玉砕
所在地 愛知県幡豆町
三ヶ根山
(64頁参照)





ウオッゼ環礁遠望



ウオッゼ島の第64警備隊棧橋尖端



北西より見たウオッゼ本島



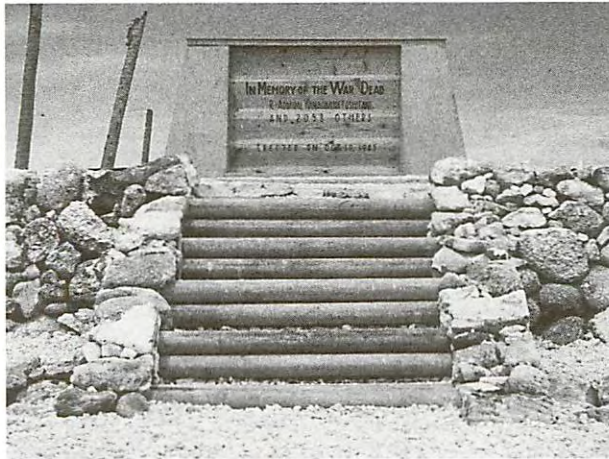
ウオッゼ島の第802海軍航空隊本部跡
昭和19年2月13日、敵B25の爆撃により鴨 遊佐夫司令、村上信一主計長他
10数名戦死、30数名が負傷した



マロエラップ環礁 タロア島



ミレ(ミリ)島



タロア島の戦没者記念碑
昭和20年10月10日、引揚に際し、第63警備隊員が建立した



タロア島の零戦残骸



ヤルト環礁 ジャボール島三軒家の通信隊兵舎



タラワ環礁 ベシオ島
 バイリキ島からベシオ島に4 kmのコーズウェイ（堤道）が、昭和62年に日本の援助で完成した



ベシオ島の南瀛の碑とマリア観音（39頁参照）



ベシオ島の第3 特別根拠地隊司令部跡



2～3人用のトーチカ



ベシオ島の慰霊公園全景



ベシオ島に据えられたアームストロング社製の太砲。シンガポールから運ばれたという



マキン(ブタリタリ)島の英霊碑(天女の像) (39頁参照)



キリバス共和国国旗
軍艦鳥は個性と力と美を、朝日は太陽を、紺色の波は太平洋を象徴し、3つの白い波は各諸島群(ギルバート、フェニックス、ライン)を表している



ベシオ島の司令部跡



マキン(ブタリタリ)島の二式飛行艇の残骸



パンダナス——タコの木ともいう
葉は干して屋根を葺き、敷物、籠、帽子、踊りの腰蓑など生活の必需品となっている。実は固いが噛むと甘い汁がでる。島民の歯が白く丈夫なのはこのおかげという



クェゼリン 平成6年8月5日



ルオット 平成6年8月4日



ルオット班 (マジュロ平和公園) 平成6年8月4日



クェゼリン班 平成6年8月5日



ブラウン 平成6年8月4日



マロエラップ 平成6年8月5日



マロエラップ班 平成6年8月5日



ブラウン班 平成6年8月4日



ウオッセ班 平成3年4月4日



洋上慰霊
空や海、又は遠い孤島で散華された英霊には船上に祭壇をしつらえてお祈りし、お供物を海に捧げた



太平洋国立記念墓地（ハワイ）平成6年8月6日



50年祭 平成6年3月27日



本会会員章



本会会旗



みたまつりの大型献灯



忠魂慰霊副碑 遊就館



置時計奉納式 遊就館 平成元年6月29日





50年祭参列者 平成6年3月27日 靖国神社

2 マーシャル方面戦域の状況

----- 本項の I. ～ IV. は厚生省社会・援護局の文書を、V. は本会の資料をもとに作成しました。-----

<p>内 容</p> <p>I. マーシャル諸島……………29</p> <p>1 マーシャル諸島の概況……………29</p> <p>2 マーシャル諸島の戦略的価値と防備の状況 ……29</p> <p>3 マーシャル諸島に対するアメリカ軍の進攻 ……30</p> <p>4 マーシャル諸島における部隊別戦没者数 ……33</p>	<p>5 マーシャル諸島における遺骨の状況 ……33</p> <p>6 マーシャル諸島における遺骨収集 ……33</p> <p>II. ギルバート諸島……………33</p> <p>1 ギルバート諸島の概況……………33</p> <p>2 ギルバート諸島における戦闘の概要 ……34</p> <p>3 ギルバート諸島における戦没者数(海軍部隊) ……35</p> <p>4 ギルバート諸島における遺骨収集 ……35</p>	<p>III. 東太平洋戦没者の碑……………35</p> <p>付図</p> <p>1. マーシャル諸島の部隊配備図……………36</p> <p>2. ギルバート諸島の部隊配備図……………37</p> <p>IV. 関連資料……………37</p> <p>大東亜戦争における戦没者数……………37</p> <p>V. マーシャル諸島とギルバート諸島の墓苑 ……38</p>
---	--	---

I. マーシャル諸島

1 マーシャル諸島の概況

マーシャル諸島は、北緯 4°30′～15° 東経 161°～175°の間に幅約370キロメートル、長さ約930キロメートルにわたって北西から南東に延びる2列のラリック及びラタック両列島からなり、約30個の環礁と約850の珊瑚礁からなっている。

環礁内の各島は、平坦で、たまに標高8メートルあまりの所もあるが、多くは1.5メートル

ルから6メートルの高さに過ぎない。気温は、年間を通じてほとんど変化なく27度～28度で年中スコール性の雨が多く、植物はよく繁茂し、椰子、バナナ等を多く産する。またコプラは重要な輸出資源である。

原住民は、ミクロネシア系カナカ族が主で人口は約43,380人である(1988年国勢調査による)同諸島は、大正9年にカロリン諸島とともに日本の委任統治領となり、第2次大戦後は、アメリカの信託統治領となり、1986年10月21日にマーシャル諸島共和国として独立した。

2 マーシャル諸島の戦略的価値と防備の状況

マーシャル諸島の各島は、地積が狭いうえに平低で、しかも地下水が浅く防備施設の構築はきわめて困難な状況であるが、同諸島に有力な地上兵力を配置するときは、海上戦力と相まって、進攻敵艦隊に対する戦略的優位を占めうる重要な地域であった。

開戦初期におけるマーシャル諸島は、中部太平洋方面の海軍の前進根拠地として作戦部隊の基地となり、その後も長期にわたって航

空及び潜水艦の各部隊の基地としての機能を果たしたほか、ウエーキ島及びギルバート諸島方面に対する中継補給基地としても重要な役割を果たしていた。

以上の理由から同諸島には多数の航空基地が建設されたが、地上の防備施設は地形上の制約によってほとんどが上空に暴露したままであった。米軍のソロモン方面における反攻やギルバート諸島の失陥等から地上防備の強化が叫ばれたが、船舶の不足と米潜水艦や航空機の行動が活発化したため、鋼材、セメント等の資材の輸送が困難となり、ために飛行場以外には満足な防備施設を構築することができず、他は大部分が“たこつぼ”程度の貧弱なものであった。

マーシャル諸島は、昭和16年3月頃から海軍の第6根拠地隊が守備し、その間兵力にも大きな変化はなかったが、17年8月アメリカ軍のマキン島奇襲以来逐次戦力を増強し、翌18年6月にはミレ島に第66警備隊（司令 志賀正成海軍大佐）が新設された。また、陸軍部隊も昭和18年9月上旬フィリピンから歩兵第122連隊が中部太平洋方面に転進し、南洋第一支隊（支隊長 大石千黒陸軍大佐）として改編され、同年12月マーシャル諸島のミ

レ、ウオッセ、マロエラップの各島において編成を完結した。さらに昭和19年1月初旬海上機動第一旅団がエニウェトック（ブラウン）島に配備された。

（付図 マーシャル諸島陸海軍部隊配備図参照）

3 マーシャル諸島に対するアメリカ軍の進攻

アメリカ軍の機動部隊は、昭和19年1月30日、突如マーシャル諸島に襲撃し、クエゼリン、ロイ・ナムル（ルオット・ニムル）、ウオッセ、マロエラップ、ミレ、ヤルート等の各島のわが航空基地を攻撃した。一方、ギルバート方面のアメリカ航空部隊もこれに呼応して連日攻撃を続け、わが航空部隊はまったく反撃の余裕すらなく、航空機のほとんどを地上において破壊された。さらに、2月1日早朝から猛烈な艦砲射撃の掩護のもとに、マーシャル諸島におけるわが軍の心臓部たる北部のクエゼリン島及びロイ・ナムル（ルオット・ニムル）島に上陸を開始した。

(1) ロイ・ナムル（ルオット・ニムル）島の玉砕
ロイ・ナムル島は、クエゼリン環礁の北

端に位置し、ロイ島とナムル島は長さ約360メートルの堤防で連結され、ロイ島は全島ほとんど飛行場で、ナムル島には兵舎その他の施設が整然と並んでいた。

両島のわが軍の配備状況は次のとおりであった。

・第24航空戦隊	
司令官 山田道行海軍少将以下	
	約1,500名
・第61警備隊分遣隊	約400名
・第4施設部派遣隊	約800名
・南東航空廠派遣隊	約200名
・軍需部関係	約20名
合計	約2,920名

昭和19年1月30日から始まったアメリカ軍の熾烈な航空攻撃と艦砲射撃により、ロイ・ナムル島にあったわが航空機は、同日中にほとんど撃破され、翌31日には島内に貯蔵してあった魚雷、爆弾、燃料等の全部が爆発焼失した。また、同島からの通信は31日06:30遂に途絶した。

アメリカ軍は2月2日夜明けとともに約600トンの爆弾と5,000発以上の砲弾をロイ・ナムル島に撃ち込み、08:30~09:00の間に環礁の内側から上陸を開始した。わ

が守備部隊の将兵は連日の砲爆撃によりその大部分が死傷し、生き残った約300名は壕及び滑走路の排水溝等を利用して抵抗をこころみたが、優勢なアメリカ軍上陸部隊には抗し得ず、2月3日04:00小数部隊に分かれて最後の突撃を敢行し、全員玉砕した。大本営は2月6日玉砕と発表した。

(2) ケゼリン島の玉砕

ケゼリン島は、戦前からマーシャル諸島の海上ならびに陸上防衛の中樞基地として昭和16年1月、海軍の第6根拠地隊司令部がここにおかれた。

その後、昭和17年4月以降逐次兵力の増強があったが、昭和19年初めアメリカ軍の来攻時の守備兵力は次のとおりであった。

〈陸軍部隊〉

- ・海上機動第一旅団第2大隊(第4,第6中隊欠) 大隊長 阿蘇太郎吉陸軍大佐以下 約670名
 - ・海上機動第一旅団第3大隊第7中隊 約250名
 - ・南洋第一支隊第2大隊第1中隊の1個小隊 約100名
- 陸軍部隊 計 約1,020名

〈海軍部隊〉

- ・第6根拠地隊司令部
司令官 秋山門造海軍少将以下 約80名
 - ・第61警備隊
司令 山形政二海軍大佐以下 約1,500名
 - ・第6通信隊 約400名
 - ・第6潜水艦基地隊 約200名
 - ・第4施設部ケゼリン支部 エバイ(エビゼ)島守備隊(第952航空隊等) 約800名
 - ・その他の海軍部隊 約520名
- 海軍部隊 計 約5,000名
陸海軍部隊 合計 約6,020名

ケゼリン島守備部隊は、外洋に面する陣地のほか環礁内からの上陸に備え、急遽内側海岸に対戦車壕等の陣地を構築したが、完成に至らないまま1月30日アメリカ軍の空襲が開始された。翌31日の空襲は前日にも増して激しく、07:00頃から艦砲射撃も加わり、いよいよアメリカ軍の上陸が切迫したことを察知したわが軍は、秘密書類の焼却を行った。

2月1日早朝アメリカ軍は、17隻の艦艇と45隻の輸送船をもって環礁に接近07:30頃礁外から南砲台付近に上陸をこころみた

が、わが軍はこれを撃退した。翌2日06:30アメリカ軍は、砲爆撃とともに再度ケゼリン島西海岸に上陸を開始した。艦砲射撃の支援のもとに戦車を先頭に前進を始めたが、わが守備隊は断固として組織的な抵抗をこころみ、2月3日飛行場東側地区の陣地をめぐる彼我の激闘が続いた。夜になって米軍は野戦砲と艦砲による擾乱射撃を継続し、海上の駆逐艦は照明弾でわが軍の夜襲を警戒した。しかしながら、わが守備隊は残存兵力をもって夜明けまで逆襲をくり返したため死傷者が続出した。

2月4日未明とともにわが陣地は、米軍戦車により破壊され、わが守備隊は全員死を決しアメリカ軍に突入したが、機銃掃射と砲火のため大半が瞬時にして戦死した。

2月5日12:00頃アメリカ軍は島の北部にある大棧橋付近まで前進した。東海岸に残存したわが軍は頑強に抵抗したものの、もはやアメリカ軍の進攻を阻止することはできず、遂にケゼリン島守備部隊は全員玉砕した。

ケゼリン環礁内のエバイ(エビゼ)島など小離島は2月1日から4日までの間に砲爆撃掩護のもとにアメリカ軍が上陸し、5日

までにケゼリン環礁は完全に占領された。
大本営は2月6日玉砕と発表した。

(3) マジュロ環礁の被占領

アメリカ軍は、ケゼリン環礁の攻略と並行してマジュロ環礁を無血占領した。

マジュロ環礁は、ケゼリン環礁の南東約400キロメートルに位置し、50余の島からできており、そのうち礁湖の南側を閉ざしている細長い島がマジュロ島である。環礁内で最も重要な島は東側のダーリット島とドラップ島であり、礁湖の東半部は多数艦船の停泊に適している。

わが軍がこの環礁を放棄したのは、良好な泊地ではあるが陸上基地をつくることが困難であったためであり、アメリカ軍は同環礁に日本軍がいるという判断に基づいて準備砲撃を始めたが、偵察の結果日本軍がないことがわかり2月1日朝完全にこれを占領した。

占領後のマジュロ環礁は、アメリカ海空軍の前進基地となり、また、移動補給基地として多数の油槽船隊が占領後まもなくマジュロ港に入港した。その後、中部太平洋における高速空母機動部隊の作戦基地となった。

(4) エニウエトック（ブラウン）環礁の玉砕
エニウエトック環礁は、トラック島の東北方約1,200キロメートルにあるほぼ円形の環礁で、マーシャル諸島第2の礁湖を有する。大艦隊の泊地として良好なため、海軍は昭和17年11月、第4施設部が飛行場を建設、中型陸上攻撃機の中継基地として使用、昭和18年10月にはケゼリンの海軍第61警備隊から分遣隊が派遣された。昭和19年1月には、陸軍の海上機動第一旅団が満洲から移駐した。

米軍来攻時のわが軍の配備状況は次のとおりであった。

・海上機動第一旅団（陸軍）	
旅団長 西田祥実陸軍少将以下	2,810名
・第61警備隊分遣隊（海軍）	49名
・第952海軍航空隊	150名
・測量隊	50名
・建設要員	301名
・山九運輸会社	200名
	合計 3,560名

米軍の空襲は、昭和19年1月31日から開始され、2月中旬までに地上施設はほとんど破壊された。米機動部隊は猛砲撃のあと、2月19日より各島に上陸をはじめ、激

戦が続いたが、日本軍はエンチャビ2月19日、エニウエトック2月22日、メリレン2月23日、それぞれ最後の突撃を敢行して、全員玉砕した。

大本営は、ブラウンについては国内に与える士気上の配慮からか、何等の発表もせず、陸海軍とも2月24日戦死と各個に通知した。

(5) ヤルート、ミレ、マロエラップ、ウオッゼ、ナウル、クサイ等の各環礁・島嶼の状況

米軍は、ギルバート諸島攻略後マーシャル諸島一帯の日本軍基地を空襲し、施設、飛行場を破壊したが、前記の戦略上不可欠な環礁を占領したあと、日本軍が比較的多くの兵力で防備していた、標記の各環礁及び島嶼を除き、19年4月上旬までにマーシャル諸島の掃討または占領を完了した。

ヤルート、ミレ、マロエラップ、ウオッゼ、ナウル、クサイ等においては、米軍の攻略を免れたものの、米軍の絶対制海、制空権下に孤立し、昭和19年6月から終戦にいたるまで補給の断絶した島々で飢餓との戦いを強いられたのであった。

4 マーシャル諸島における部隊別戦没者数

部隊名		戦没者数	部隊編入者の多い都道府県名
陸軍	南洋第一支隊	590	愛媛・香川等
	海上機動第一旅団	3,028	全国
	南洋第二支隊	243	〃
	歩兵第107連隊	866	石川・長野・富山等
陸軍計		4,727	
海軍	第4艦隊司令部	294	全国
	第6根拠地隊	434	
	第6通信隊	397	
	第6潜水艦基地隊	114	
	第61警備隊	2,251	
	第62 〃	155	
	第63 〃	883	
	第64 〃	1,640	
	第66 〃	187	
	第42 〃	18	
	第54 〃	25	
	第4施設部	4,101	
	第4海軍軍需部	287	
	第4海軍工作部	436	
	第4海軍経理部	9	
	第4海軍気象隊	40	
	第4港務部	4	
	第4測量隊	4	
	トラック海軍運輸部	53	
	運輸本部	437	
第10海軍軍用郵便所	4		
第13 〃	17		
第14魚雷調整班	87		

海軍	南東方面海軍航空廠	218	全国
	水路部	129	
	第111設営隊	11	
	第14海軍航空隊	3	
	第22 〃	2	
	第252 〃	76	
	第281 〃	167	
	第531 〃	2	
	第552 〃	16	
	第752 〃	167	
	第753 〃	99	
	第755 〃	570	
	第702 〃	1	
第802 〃	6		
第952 〃	732		
第22航空戦隊司令部	5	(艦船乗員)	
その他	424		
海軍計		14,505	
合計		19,232	

5 マーシャル諸島における遺骨の状況

マーシャル諸島は、第2次大戦後アメリカの信託統治領となり、エニウエトック(ブラウン)環礁はビキニ環礁とともに1946年以降アメリカの原水爆実験基地として使用されたため入域を許されなかった。なお、マーシャル諸島における日本人戦没者の遺骨は、アメリカ占領軍により戦場整理が行われているので、野ざらしの遺骨はほとんどないものと思われる。

6 マーシャル諸島における遺骨収集

戦没者数	遺骨数					計
	昭.46年	48年	50年	57年	60年	
19,232	706	1,965	7	13	1	2,692

(慰霊巡拝の際及び民間団体による収集数を含む)

II. ギルバート諸島

1 ギルバート諸島の概況

ギルバート諸島は、マーシャル諸島の南南東、ソロモン諸島の北東、赤道線上にある28個の島からなり、総面積は約720平方キロメートル、人口約72,300人、(1990年国勢調査)典型的な珊瑚礁で、主な島はタラワが最大で、ブタリタリ(マキン)、アベママ島等がある。原住民はメラネシア系で体格がよく、性格も勇敢で、忍耐強く、好戦的なことは有名である。1892年イギリス保護領、1916年イギリスの直轄植民地となり、1979年7月12日キリバス共和国として独立した。

1941年から43年まで日本軍が占領、ブタリタリ(マキン)、タラワの激戦は有名である。主要産物はコプラ、真珠貝である。

2 ギルバート諸島における戦闘の概要

(1) ブタリタリ (マキン), タラワの防備
ブタリタリ (マキン), タラワ両島は、わが国防圏前衛線東端のギルバート諸島中の要衝であった。タラワには陸上航空基地があり、第4艦隊麾下の第3特別根拠地隊の主力が守備にあっていた。また、ブタリタリ (マキン) 島には、水上機基地があり、この方面の航空作戦は主としてマーシャル諸島に基地を有する第22航空戦隊約100機がこれに当たることとなっていた。

(2) 敵の上陸とわが軍の玉砕

ギルバート諸島に対する敵の攻略企図は昭和18年8月頃から顕著となり、敵は8月ギルバート南方のエリス諸島を占領し、さらに9月には東方のベイカー島を占領した。これらの諸島を基地として、10月からわがギルバート諸島の守備部隊に対し空襲を開始し、また敵機動部隊の中部太平洋における活動も積極化し、9月以後、ギルバート諸島、ウェーキ及び南鳥島 (マークス) に来襲し、いよいよ中部太平洋における攻

撃開始の近きを思わしめるものがあった。しかしながら、11月上旬の中部ソロモン航空戦における大戦果を信じていたわが連合艦隊は、この航空戦により敵は相当の損害を受け、中部太平洋方面に対する新企図も相当遅延するであろうと判断していた。

米軍来攻時のわが軍の配備状況は次のとおりであった。

1	ブタリタリ (マキン)	
・	第3特別根拠地隊派遣隊	243名
・	第952海軍航空隊派遣基地員	60名
・	第802海軍航空隊派遣基地員	50名
・	第111海軍設営隊の1部	340名
	合計	693名

2 タラワ

・	第3特別根拠地隊	
	司令官 柴崎恵次海軍少将以下	902名
・	佐世保第7特別陸戦隊	1,669名
・	第755海軍航空隊派遣基地員	30名
・	第111海軍設営隊の大部	2,000名
	合計	4,601名

敵は、11月19日早朝大規模な空襲をブタリタリ (マキン), タラワ及びナウル島に対して開始した。わが第4艦隊司令長官はただちに第22航空戦隊に反撃を命じた。また、

潜水艦部隊を所定迎撃配置に就かした。

敵は、20日も空襲を反復し、21日早朝ブタリタリ (マキン), タラワ島に上陸を開始した。ブタリタリ (マキン) 島守備隊との無線連絡は04:30以後不可能となった。

わが連合艦隊は機動部隊の作戦参加を命ずるとともに、ポナペ島に待機中の歩兵第107連隊をもって敵の上陸地点に逆上陸を敢行し、かつ連合艦隊主力をもって23日トラック島を出発、好機を捉えて敵艦隊と決戦を行うことを企図したが、タラワ、ブタリタリ (マキン) 島の早期失陥により、ギルバート諸島奪回と敵機動部隊の撃滅は困難な状況となった。

一方タラワ及びブタリタリ (マキン) 両島のわが守備部隊は、敵の上陸以来勇戦奮闘し、特にタラワ島においては、一時敵を上陸点の水際に圧迫して大いに戦果を収めた。しかしながら衆寡敵せず、また地形上陣地構築至難な事情もあり、地上戦闘は急速に終局に近づき、22日13:00には遂にタラワとの無線連絡が途絶した。ブタリタリ (マキン), タラワのわが守備隊は最後の突撃を敢行し、昭和18年11月25日遂に全員玉砕した。